

## 仕事についての価値意識の類型

### ——潜在クラス分析によるアプローチ——

立教大学 田靡裕祐

#### 1 目的

本研究では、価値(ないし価値意識)をキー概念とし、働き手の意識のあり方についての探索的な計量分析を行った。

見田宗介は価値について、「主体の欲求をみたま、客体の性能(見田 1996:17)」という端的な定義を与えた。その上で、1) 多くの客体に対する主体の価値判断の総体が、その主体の<価値意識>であり、2) 個々の客体に対する多くの主体の価値判断によって、その客体の<社会的価値>が構成されるとした。このように見田の価値理論は、価値の主体的側面と客体的側面を明確に区別するところに特徴がある。

これまでの仕事の価値の研究は、後者について、すなわち客体の側に焦点をあてた分析や議論が中心であった。仕事の価値は、個々の仕事の特性(たとえば「失業の心配がない」や「専門知識や特技が活かせる」など)に対する望ましさを評価や順序付けによって操作化され、因子分析による潜在的な基軸(見田の用語では、社会的価値の基軸)の抽出や、時系列変化の趨勢、規定要因などについての検討が行われてきた(岡本・原 1979, 米田 2008, 田靡・宮田 2015 など)。

一方で本研究では、前者、すなわち主体の側で生じていることについての分析を試みた。まず、さまざまな仕事の特性に対する重要性評価に基づいて、いくつかの価値意識の類型を抽出した。その上で、個人属性や社会階層と価値意識の類型との関連を検討した。

#### 2 方法

本研究では、2015・16年に実施した、公募モニター方式によるインターネット調査のデータを用いた。調査対象は、全国の20歳から79歳までの男女である。性別・年齢層別・学歴別の人口構成比(国勢調査ベース)に比例するように割当を行った。

仕事の価値は、23項目の仕事の特性に対する重要性の評価(「とても重要である」から「まったく重要でない」までの4件法)によって測定した。価値意識の類型の抽出には、潜在クラス分析(LCA)を用いた。個人属性・社会階層との関連については、多項ロジット潜在クラス回帰モデルを用いた。

#### 3 結果

まず因子分析を行い、先行研究と同様の社会的価値の基軸(内的価値/外的価値)が抽出されることを確認した。LCAの結果、内的/外的価値の両方を重視する/重視しないパターンに加えて、内的価値全般を重視しないパターンや、内的価値のなかでも「独立」や「責任」などを忌避するパターンなど複数の価値意識の類型が示された。個人属性・社会階層との関連については当日報告する。

#### 文献

見田宗介, 1996, 『価値意識の理論—欲望と道徳の社会学』弘文堂。

岡本英雄・原純輔, 1979, 「職業の魅力評価の分析」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会, 421-433。

田靡裕祐・宮田尚子, 2015, 「仕事の価値の布置と長期的変化—「日本人の意識」調査の2次分析」『社会学評論』, 66(1): 57-72。

米田幸弘, 2008, 「仕事の内的報酬志向の形成要因」轟亮編『2005年SSM調査シリーズ8 現代の階層意識』2005年SSM調査研究会, 175-189。